

## 〈論文〉

# アウグスト・ロア・バストスはいかにして 歴史を書かなかったか

——『人間の子供』について——

青木健史

## I 序

本論の目的はアウグスト・ロア・バストスの小説『人間の子供』の読解にある<sup>1)</sup>。この作品からはいくつかの論点を取り出すことができるのだが、多くの解説者はそこにある種の政治的なメッセージとプラスアルファを読みとっている。その主旨はおよそ次のようなものだ。『人間の子供』はある種の証言のような性格を持っている、それは（公認の）歴史に対して異議を申し立てながら、バラグアイの国家や民衆の現実を問い正そうとする。が、そこには社会派の抗議文学以上の何かがある、たとえば小説技法上の洗練などがそれだ。概して言えば、ロア・バストスの仕事が問題にされる時、その主題が創作の内容に関わるものであれ技法に関わるものであれ、優先的に『人間の子供』が参照される向きがあり、また肯定的な評価が与えられることが少なくない。あるいは他の作品が論題に上る場合にも、発生的な到達地点として係るテキストが念頭に置かれ、それとの連関において論述がなされる向きがある。したがってこうした一般的な文脈を配慮した上で、作業手順としてまず本論では『人間の子供』に関わる既存の主要な見解の妥当性を再検討することにする。

以下の論述で私たちはその歴史批判性という点から係るテキストを再解釈し、その批判力の射程を標定してみる。事実、注釈者たちの指摘するよ

うに、このテキストにそうした成分を確認することはさほど困難ではない。ただし、私たちの考えによれば、このテキストの大きな特徴の一つは、歴史批判の内容というよりも、むしろその方法にある。これが本論の主要な論点である。だが、だとすればロア・バストスの歴史批判は、いかにして、そしてどこまで機能しているのか。

まず二点ほど確認しておく。(1)『人間の子供』の普遍妥当的な性格と、(2)作品の統一性について。

(1) ある解説者はこの作品の普遍性・一般性に触れて次のように言っている。『人間の子供』において作者はある誘惑を乗り越えた。こうしてパラグアイを超越してアメリカの作家となり、さらにアメリカを超越して世界の作家になった。ある誘惑というのは「アメリカ版の申し立てと抗議の社会派文学」<sup>2)</sup>の立場に身をおく誘惑のことだが、この超越が成就したのはこの作品が「冷たい抽象の産物ではなく、非常に具体的な一つの現実に基づいて創られている」からだ<sup>3)</sup>。おそらくこの解説者によれば、この作品の普遍妥当的な性格は、それが実存としての人間を首尾よく描きえているという事実にある。時間的、空間的に（つまり歴史的に）限定された人間や状況に焦点を当ててみると、そこにすべての人間に共通の「私」が発見されたということだ。

基本的に、このような意味での作品の普遍性・一般性は、私たちの考えと不整合を生じるものではない。だが、本論において私たちはいささか別の意味で作品の一般性を考えている。それは『人間の子供』の歴史批判がおそらく、上のような解説者の見解に基づく読者の予期を越えて大きな射程を備えており、コミュニケーション行為一般、メディア一般の問題系に及びうるという意味での一般性である。この一般性はロア・バストスの歴史批判の方法と深く関わっている。彼の歴史批判はコミュニケーション批判の特殊なケースだと考えられる。では係る批判はいかにして行われたのか。

(2) 上に参照した解説者は、同じテキストにおいて続けて次のように

確認している。つまり、作者は『人間の子供』が実存的な問題から出発していることに自覚的であり、また自分の創作に含意されたメッセージにも自覚的である<sup>4)</sup>。こう言って解説者は『人間の子供』の終盤のある一節を引用するのだが、その一節は別の作品解説でマリオ・ベネデッティによって引用された一節と正確に一致する。彼らがその一節に言及する文脈もおよそ同じだ。つまりテキストの特定の部分に作品全体の主題と思わしきメッセージを発見し、そこから作品の全体性あるいは合理性を導こうというものだ。二人の解説者により引用された一節の話者は、およそ次のように記している。作中人物ミゲル・ベラの手記の価値はその証言性にあり、公にされれば一人の人間を、さらにはアメリカの名譽を傷つけられた一つの共同体を理解するのに役立つはずだ<sup>5)</sup>。このような一節を作品全体に重ね合わせれば、ミゲル・ベラの手記に潜在する情報価値は、直ちにロア・バストスの『人間の子供』の価値と同一のものとなる。『人間の子供』には、ある人間、ある共同体の理解に役立つ「証言」としての価値がある、ということになる。

しかし私たちは本論において上のような読解の立場には立たない。『人間の子供』においては、二人の解説者によって示されたような読解がテキストの意味の全体性を導出するとは考えにくい。つまりテキストの特定部分から作品全体の「本質的な統一性」<sup>6)</sup>を単純に導けるとは、私たちは考えない。『人間の子供』において注意を払うべきなのは、むしろテキストの諸部分や部分と全体のあいだの緊張関係だと思われる。というのは、後で確認されるように、作者がコミュニケーション行為の可能性にむしろ否定的な態度を示している箇所は少なくないからだ。「証言」は係る行為の特殊な形態だが、そうなると歴史の「証言」はおろか、それ以外の理解、記憶、歴史、学的知などといった現象（伝達行為一般）は、すべて少なくとも疑問視されることになるだろう。私たちの考えでは、ミゲル・ベラやロア・バストスのテキストは「証言」である以前にまず、その失敗可能性である。所々で伝達行為の可能性を疑問視するテキストの身振りは、たと

えばミゲル・ベラのテキストの「証言」価値を主張する部分的言説と緊張関係を生じる。この読解の方向性は上に参照した解説者たちのそれと対立するだろう。だが、それだけではない。さらに作者自身の指定する読みの方向性の一つとも対立せざるをえまい。なぜなら作者によれば『人間の子供』はパラグアイという世界についての知を伝達するはずだからだ。それは「パラグアイ社会の生活と歴史に着想を得た」「パラグアイの現実のしぼり汁の中で練り上げられて」生まれた小説なのだから<sup>7)</sup>。

では歴史に関わるロア・バストスの批判はどこに向かっているのか。ここで補助線を引いておく。『人間の子供』のロサーダ賞受賞の折りにロア・バストス自身、ラテンアメリカ作家の普遍性ということに言及しているが、本論で問題にされるこの作家の歴史意識は、たとえそれが特殊な経験的文脈により動機づけられたものだとしても、一方でそれを超出して共有される、ある一般性を宿している。本論の遠近法における限りこのパラグアイ作家は、たとえばニーチェやディルタイ、あるいは小林秀雄らとは大いに異なる歴史的な文脈におかれている。だが、にもかかわらず彼らには共通する問題意識を認めることができる。そこで私たちはまず小林秀雄のテキストを参照しつつその歴史批判を内容の面から焦点化し、いくつかの論点を整理することで小林の論点が『人間の子供』の問題意識や批判的方法と深く連絡していることを明らかにしてみたい。

## II 歴史批判は何をめがけるのか

### 1 歴史批判の論点

小林秀雄は「歴史と文学」というテキストにおいて、歴史にまつわるある種の抵抗感を示している<sup>8)</sup>。彼の抵抗は、おもに当時流通していた歴史形而上学的な歴史観を対象としている。その問題意識を要約的にさらってみよう。

歴史という言葉がもてはやされている。唯物史観をきっかけに人々の歴史的意識が高まったと言われるが、その反面、じつは「本当の歴史」は紛

失ってしまったのではないか。主義・思想の理論上の構造を盲信する者は「歴史の実景」に触れているつもりが、じつは「歴史の地図」を読んでるにすぎない。近代合理主義の史観は、人間がいなければ歴史はないという簡明な真理を忘れてしまいがちである。「現代人は、何は兎もあれ、歴史の客観性だとか必然性だとかいふ言葉を、実によく覚え込んで了つたのであります」<sup>9)</sup>。

小林の抵抗感はある種の隔たりに対する異和感に発している。それは「史観」つまり歴史理論とその対象とのあいだの距離への異和感だと言ってよい。このため小林は、ある史観とそれによって基礎づけられた歴史を「本当の歴史」として容認することができない。ならばこの違和感を生む「歴史の地図」と「歴史の実景」との距離とはいかなるものか。続けて小林はおおよそ次のように記している。

歴史を貫く筋金は「僕等」の愛惜の念なのであって因果の鎖などではない。母親にとっての歴史事実とは、子供の死という事件の物理的諸条件というよりはむしろ、代替不可能な生命が取り返しようもなく失われたという感情を基体としているはずだ。それでこそ過去の事件が今もなお在ると感じられるのだ。子供の死という事実を退引きならぬ確実なものにするのは、他でもない、変わらぬ母親の愛情なのだ<sup>10)</sup>。

小林の言う「本当の歴史」あるいは「歴史の実景」とは、おそらく物理的・論理的なパラメータの組み合わせに還元できない「意味」としての存在者により構成される世界である。この点で小林の存在者認識は『存在と時間』におけるハイデガーに近い。存在者の存在の意味は「現存在」(人間の存在)の「関心」により規定されるということだ<sup>11)</sup>。歴史理論からこぼれ落ちるもの、それはある歴史的事実が「私」にとって持つ「意味」にほかならない。「意味」により歴史的事実は絶えず活性化され、事實は「退引きならぬ確実なもの」となる。小林が「史観」を容認できない理由はこうした「意味」の欠如から理解される。その欠如ゆえに「歴史の地図」は疎遠で不案内なものにしか見えず、そこに距離感が生じることにな

る。この隔たりに小林は抵抗を示している。

では、もう一方の「歴史の地図」とはいかなるものだろうか。小林はおそらく特定の「地図」を念頭においているのだが、その「地図」は次のように批判される。すなわち、当時（小林の時代）の史学は、因果的發展にせよ弁証法的發展にせよ、「歴史の合理的な發展といふ考へ」<sup>12)</sup>を前提していた。が、小林によれば歴史は将来の予想というプログラムを執行しようとしたものでもなければ実行したものでもないし、歴史的事実を合理的な歴史的發展図式の諸項目としてしか考えられぬ事は、妄想かつ顛倒であるに違いない。

つまり小林の批判の標的は、ヘーゲルの歴史形而上学だと言ってよい。それは神を後見人とする理性によって指導された歴史目的論に他ならない。ヘーゲルを導く考えは「理性が世界を支配するという、したがって世界史においてもまた一切は理性的に行われてきたという、単純な理性の思想」<sup>13)</sup>というものだ。

以上の検討から、小林秀雄の抵抗の主な対象を二つ、つまり歴史を理論化できると考える態度と、その産物としてのヘーゲル的な歴史形而上学というように整理することができる<sup>14)</sup>。

## 2 作者の課題

私たちは上に、大きく見て二つの歴史体制の対立関係を確認したことになる。そこで問題化されているのは「歴史」と「私の生」との両立可能性の問題だと言ってよいだろう。『人間の子供』に宿る歴史批判は一面においてこの対立関係から理解される。ヘーゲルでは理性偏重が主体を圧倒していた。小林秀雄のテキストは客観からこぼれ落ちる生の生動性を歴史に取り戻そうとする。だが小林は、歴史の客観化可能性についての問題には立ち入らない。ロア・バストスはいずれの立場もそう簡単には容認できないようだ。二つの立場は彼にとっては対立的に見えるが、また同時に相補的でもある。私たちの関心の対象は、ロア・バストスがこの二つの立場の

あいだで引き裂かれているという事実と、それがテキストに構造化される方法にある。ロア・バストスの問題意識は次の二点から想定される。

第一に、ロア・バストスは歴史相対主義の立場から客観的歴史や「公認の歴史」<sup>15)</sup>を批判することはできない。相対主義は定義上、相対主義自身をも相対化せねばならず、したがって既成の歴史をもまた相対的な一つの真実として追認せねばならない。確かにロア・バストスの問題意識には匿名の「私」の生の救出があるようだ。「そして彼のような人間はたくさん存在したのだ、数え切れぬほど、名も知られぬまま」<sup>16)</sup>。事実、いくつかの章立てを与えられて何人かの作中人物の「生」が主題化されてもいる。だがロア・バストスは相対主義の立場に立てない。彼には相対主義の回避と「私」の生の救出が同時に要請される。

第二に、『人間の子供』のプログラムは、客観的歴史の解体というよりも、むしろ、その書き直しに向かっていくような徴候がある。事実、本論の冒頭でも確認したように、作者の念頭にはパラグアイの現実の構成という仕事が置かれているし、また『人間の子供』をそうした歴史／物語と考えることも不可能ではない。おそらく客観的歴史は作者によって必要とされている。ならば彼の問題は客観的歴史の解体の上に主観的生の救出することではあるまい。むしろ、見過ごされた「私の生」を客観的歴史のあいだに、いかにして記載することができるのか、それが問題となってくるだろう。

### Ⅲ 〈私〉という閉域：語りの構造について

#### 1 〈私〉の構造

ところでロア・バストスは、なぜ一貫して一人称で書かなかったのだろうか。ある語りの理論によれば、一人称の小説は「時系列的に組織立てられた出来事についての、本当らしく異論の余地のない語りとしての小説という概念に抗議できる」<sup>17)</sup>。こう考えるなら、一貫した一人称により作者は客観的歴史に抵抗しつつ主観的生の回復に、一層効果的に専念できたの

かもしれない。

より具体的に『人間の子供』に接近してみよう。そこではいくつかの語りの技法が利用されていた。語りの人称の切り替え操作がその一つだが、たとえばそうしたテキストの身振りに客観的歴史への主観的生の書き込みの痕跡を認めることはできるだろうか。『人間の子供』においては語りの人称操作（一人称／三人称）がほぼシステムティックに実行されている。ふたたび先の理論家によれば、三人称の語りには「客観性」を演出し、その結果、物語世界における事件についての作者による言明を「議論の余地のないもの」として受けとるよう要請されていると読者が感じるほどの効果がある。また他方「語り手を信頼できない」という理由から、一人称の語りには言明の情報価値について「非常に独特な不確実性」を感じさせる効果がある<sup>18)</sup>。だとすれば一人称と三人称の関係は、主観的生と客観的歴史との対立関係に、ある程度重ね合わせて考えることができるかもしれない<sup>19)</sup>。そうなれば『人間の子供』の人称切り替えを客観的歴史への主観的生の書き込みだとみる解釈も少しは妥当性をもってくるだろう。一人称の語りを三人称の語りのあいだに挿み込んでゆくこと、その意味は上にみたような作者の戦略上の要請から理解されることになる。だが、こうして一人称の語り手（ミゲル・ベラ）の生は、はたして救われることになったのか。そもそも一人称の語り手とはいかなる存在者なのか。

先に検討した二つのタイプの歴史体制の問題を〈私〉の問題と関係づけよう。『人間の子供』に構造化された語りの人称操作が歴史批判に対して持つ意味は、〈私〉という特異点の構造から理解される。

「〈私〉とは、〈私〉という言語上の現存を含むいまの話の現存を言表する主体である」<sup>20)</sup>。ここで注意を要する点は、この〈私〉が言表行為の主体（「いまの話の現存を言表する主体」）ばかりではなく、同時に言表の主体（文の主語）をも指示するという点だ。言い換えれば〈私〉は単一の主体を二つの資格の下に分割する。一つは述定的レベルに定位される〈私〉、もう一つは行為遂行的レベルに定位される〈私〉である。〈私〉は二つの

レベルに同時に所属することでそれらを短絡させる。そしてこのような〈私〉の二重性、二つのレベルへの二重所属は、言語構造から必然的に導出されるという点に注意しておこう。主語が三人称におかれた文との差異はすでに明らかだろう。三人称の主語をもつ文では、通常、言表行為の主体と言表の主体との一致は生じないし、かりにそのような一致を想定する妥当性がある場合でも、その一致は三人称の形式上の必然性からは導出されない。

〈私〉という特異点の構造、つまり言表レベル（述定的）と言表行為レベル（行為遂行的）への二重所属の必然性を以上のように考慮に入れると、『人間の子供』における人称切替の問題を、上に検討しておいた二つのタイプの歴史／世界の体制の問題と関係づけることができる。まず〈私〉という特異点の構造およびそこに開かれる世界は、ハイデガー的な現存在／世界のそれと形式的に等しい。『存在と時間』の前半部分において示された新しい主体の存在体制を想起しよう。そこでは人間はすべての存在者の存在を規定する「現存在 Dasein」であると同時に、他方「世界内存在 In-der-Welt-sein」でもある。つまり現存在としての人間は、その「関心 Sorge」に応じてそのつど自己の世界を構成しつつそれを生きるのだが、他方、自分がいつもすでに一定の具体的な世界の中にいることを既成事実として見いだすという、強く逆説的な仕方では存在する。ここで次の点が注意されねばならない。すなわち、経験的・超越論的二重体としての現存在のこのような二重所属性は、言語的テキスト一般における〈私〉の構造と形式的に一致する。言説（物語世界）の構成員でありながら、しかも言説全体をも構成するという奇妙な構造が〈私〉によって構造化されることになる。

ならば、三人称の語りによって構想される世界とはいかなるものだろうか。三人称の語りは定義上、〈私〉を指示する語や形態素を含まないテキストの部分あるいは全体を意味するが、そこでは語り手は決して自分を話題にすることはなく、つまり語り手は言表（文）のレベルには存在しない。

言表行為の主体としての〈私〉、つまり語り手は、物語世界に所属しないことで物語世界を超越する。それは世界を構成するが世界に所属することのない超越論的・形而上学的主体である。このような主体／世界の体制は、上で参照したヘーゲル的な歴史構成の構図と形式的に同型である。歴史／世界の構成者（歴史哲学者）は歴史／世界から一定の距離を確保しつつそれを対象化し、透明な視線で世界とその意味を確定してゆく。三人称の語りを選択すること、つまり〈私〉の標識を排除すること、それはこのような形而上学的主体とそれに根拠づけられる世界の体制を、物語世界の枠構造としてテキストに起用することを意味する。

## 2 人称操作の意味

『人間の子供』の構成を想起しておこう。私たちの参照するテキストは全部で10章の部分から構成されているが、そのうち一人称の語りにおかれているのは、1章、3章、5章、7章（日記体）、9章、10章である。残りの章は三人称におかれている。一人称におかれている章の〈私〉は、9章を除いて、内容上の一貫性から作中人物ミゲル・ベラの〈私〉に一致すると思われる。問題になるのは、まず、三人称におかれた部分に要請される言説の所有者、つまり存在するはずのもう一人の言表行為の主体が誰なのかということ、あるいはその姿を見せぬ人物の言表と一人称におかれた章（ミゲル・ベラによる言表）との関係だろう。たとえばある批評家は『人間の子供』の九つの語りは全てミゲル・ベラのものだと考えている。そのうち五つの章においてはミゲル・ベラは作中人物／語り手の肩書きで、残りの四つの章においては全知の視点の語り手の肩書きで語ることになる<sup>21)</sup>。一方、フォスターは『人間の子供』に含まれる言表の所有者探しにおいて、考えを一転させた経緯を告白している。彼もまた最初はテキストの全体をミゲル・ベラの言表に帰属させて理解したが、やがてその見解を取り下げ、そのかわりに半分がミゲル・ベラのもので残りは別の人物による言表だと結論した。彼は三人称におかれた章に記された情報の入手可能

性の点から、ミゲル・ベラが知らなかったはずの情報を指摘し、テキストの半分の所有者としてはミゲル・ベラに失格判定を下す<sup>22)</sup>。が、ここでは言表の所有者の問題には立ち入らず、上に確認した人称の構造特性からその切り替えの意味を考えてみる。

整理してみよう。私たちはある問いを保留にしている。ロア・バストスはなぜ一貫して一人称で書かなかったのか。この問いは次のように言い換えてよい。『人間の子供』の語りの人称操作は何を意味するのか。思い出してみよう。このテキストは事実、巨視的には国家的レベルの歴史事実と深く連絡しながら、他方、多くの場所で個人的なエピソードを扱っている。国家的事件が個人的なエピソードからとらえ返される、と言ってもよい。ところで問題にされるエピソードはほぼすべて、国家的歴史に黙殺されがちな匿名の英雄（クリストバル・ハラ他）であるか、あるいは黙殺に値する矮小な人間（ミゲル・ベラ他）のささやかな生の一片である。いずれにせよ放っておけば「無言の過去の暗がり」<sup>23)</sup>への埋没は免れようもなさそうだ。全体よりもむしろ個にアクセントがおかれている点に注意を払えば、この作品におけるロア・バストスの理論的な立場はヘーゲルの史観よりもむしろ小林秀雄やハイデガーによる生／世界の構想の方に近い。だとすれば一人称の語りがふさわしいと考える理由もありそうだ。たとえばそれは、思想化・客観化の困難な〈私〉の内面性を、語り手による平板化された推量としてではなく、むしろ〈私〉による告白として首尾よく開示できたかもしれない。そうなれば、作者は物語を通じて「パラグアイ的存在」の定義を求め、同時にそれを通じて「ありのままの人間」<sup>24)</sup>について何らかの展望を入手することもできたかもしれない。だが実際には作者は三人称の語りもあわせて起用した。なぜだろうか。

この問題を検討するために、人称代名詞〈私〉によって選び取られる主体／世界の構造を、別の角度から少し考えておく必要がある。ハイデガー的現存在としての〈私〉は、経験的レベルと超越論的レベルに同時に所属する主体であった。〈私〉という特異点によって短絡され、超越論的地平

(非一世界)は経験的地平(世界)へと絶えず送り返されることになる。つまりこの主体によって開かれる世界は、世界を括弧に入れることを可能にするような外部、つまり世界を理解するための世界外部的な場を持たない。したがってそこでは複数の〈私〉を連絡する言語理性の交通の可能性が破棄されているということになるのだが、そうなると世界を構成する個人意識という型通りの独我論が待ち受けている。世界が個人意識の構成作用となれば、その世界は他者を持たない単数の主体の〈私の世界〉となり、それゆえ世界が客観化する可能性も破棄されることになる。〈私〉つまり一人称の語りはこのような自閉性、コミュニケーション喪失を宿している。

ところが、すでに確認されたように、ロア・バストスはこのような主観性の閉域(相対主義)に落ち込むわけにはいかない。書き直された歴史は伝達可能なものでなければならず、〈私〉の独り言では困る。したがって生/体験は思想化され共同化される必要がある。歴史は理性の普遍的な交流形式を前提する。つまり複数の〈私〉のあいだの交通を可能にする超越論的他者(非一世界的存在)の存在が要請されるということになる、ちょうどデカルト的コギトと世界の連続性が神によって媒介されたように。物語世界には決して姿を見せぬ言表行為の主体、つまり超越論的語り手の存在は、このような事情から要請される。三人称の語り(〈私〉の排除)によって確保されようとするのは、歴史/世界の伝達を可能にする場、超越論的他者としての語り手の居場所にはかならない。

以上のように確認すると、『人間の子供』の歴史批判性と人称切り替えの操作を関係づけつつ、その意味を次のように整理することができる。ロア・バストスは一人称/三人称の章立てを併用することにより、事実上、経験的・超越論的二重体による世界の体制と、形而上学的主体による世界の体制の切り替え動作を反復していることになる。あるいはそれは単数的主観の閉域としての世界と、コミュニケーションの可能性という余白付きの世界とのあいだの選び直しである。だとすればそこには次のような含意があるだろう。つまり、ロア・バストスは、私たちがこれまで関わってき

た二つの歴史的態度の両方を容認しているが、とはいえ、いずれも完全には容認しきれない。両立困難な（あるいは不可能な）二つの「史観」のあいだでの選び直しの動作は、生と歴史との対立にも重ね合わせて理解されるだろう。客観化（言語化／語り）と同時に失われるほかない生の生動性が、いかにして客観化されうるのか。このアポリアを抱えた以上、ロア・バストスは二つの史観のいずれも破棄しきれないが、しかし両立は不可能なため、せいぜい交互に肩入れするほかはない。事実、交替する二つの語りの様態のあいだに階層構造を組織しないテキストの巨視的な統辞法は、係る二つの歴史体制の止揚不可能性を示している。一貫した人称の語りに不足するもの、それは他でもない語りの非一貫性なのであり、その非一貫性とは一人称／三人称のあいだに開かれるこのような距離、つまり作者の態度決定の留保なのである。この逡巡を起動すること、それはテキストの非閉鎖性に歴史の非閉鎖性の根拠を求めることを意味する。

ところでこうした手続きは、『人間の子供』の人称切り替えにだけ見られる態度ではない。次にこのことを確認してみる。

#### IV 『人間の子供』の斥力

『人間の子供』はいくつかのレベルにおいて多様な斥力の構造化を実行しており、その結果、事実上その意味的な確定性あるいは単一性を払い落としている。ここでは第一章を読んでみることにする。第一章は後続のテキスト全体にわたって作動する斥力をあらかじめ集約的に起動しているからだ。

第一章は何よりもまず、語り手ミゲル・ベラによる記憶の手繰り寄せである。ミゲル・ベラは「あの頃」の記憶を想起し、書き記してゆく。冒頭でこの語り手の自己言及が認められる。「ずいぶん昔のことだが、私はそのことを覚えている」(37)<sup>25)</sup>。それからいくつかのエピソードが記されていくことになるのだが、そのうちの多くがマカリオという人物の属性設定および彼の語った物語の伝承に集中している。たとえば、前半では最高権

力者 (El Supremo) の人物像の一部、マカリオの父と最高権力者との最初の信頼関係、マカリオ父子に起こった悲劇 (父の死、兄妹の離散)、戦争での受勲、妹マリア・カンデの病の顛末、そして後半ではマカリオの甥ガスパール・モラとその失踪、病、死、さらにはマリア・ロサという狂女、キリスト像に関わる事件の経緯、マカリオの死など。こうしたエピソードについてのマカリオの語りを、語り手は複製してゆくのだが、私たちが注意を払うべきなのは、そこで伝達行為の問題が主題化されているという点である。

物語世界を走る時系列にそって見てみよう。まずマカリオがいる。彼は生きて多様な経験をしただろう。そして記憶した。その記憶を一部の子供たちを相手に物語った。その中にミゲル・ベラがいた。ミゲル・ベラはマカリオの記憶を記憶した。そして今度はミゲル・ベラがその記憶を誰かに伝達しようと文字に記していく。第一章の段階で明らかにされるのはここまでだ。さらにテキストのずいぶん後になって判明するのだが、ミゲル・ベラの記録は医者ロサ・モンソンにより中継され、さらに最終的な閲覧者に差し出されている。つまり、ここで行われているのは世代を越える時間規模で実行されてゆく大がかりな伝言ゲームだと言える。『人間の子供』はある特定の物語世界／歴史を伝達する一方でこうした伝達の連鎖を伝達する、というかむしろ、この伝言ゲームこそが根拠となり『人間の子供』の物語世界が構成されていくと言うべきだろう。

ところで伝達行為である以上、マカリオやミゲル・ベラの記録／記憶もまた現在から未来にむけて発信される以外ないが、ここで問題になるのは伝達経路で起こる情報の劣化、つまり発信者と受信者とのあいだで生じる情報のズレである。伝達経路のどこかにエラーが生じたとすればどうか。だが、そもそも誤伝達の有無は確認可能なものだろうか。ならば本来の情報／歴史の行方は？ 情報の劣化は情報の一部あるいは全部の欠落ばかりではなく無用な書き加えも含むし、またメディアの物理的支持材の如何にかかわらず起こりうる。さらにこうした情報のズレが生じるためには、必

ずしも二人の身体的主体は必要ではない。情報劣化の可能性は〈私〉による記憶／想起という行為においてすでに作動している。ニーチェのイメージを参照しよう。「絶えず時という巻物から一葉の紙ははなれ、ひらりと落ちて飛び去る……にもかかわらず、またひらりと還ってきて人間のふとところに舞いもどる。すると人間は『思い出した』と言う」<sup>26)</sup>。

〈私〉の記憶によって保存された「一葉の紙」(情報)は、やがて意識の地平から「ひらりと落ちて」無意識へと「飛び去る」(発信される)が、やがて〈私〉の意識に「舞いもどる」(受信される)。このように想起が自分宛に発信された情報の時差をとまなう受信として構想されるなら、情報劣化の可能性はもはや、すべての表象行為の条件だと言わなければならない。

ミゲル・ベラにとってマカリオはいかなる存在であったのか。第一章の冒頭はこの作中人物の設定を行っている。マカリオは歴史であり、同時に歴史の根源である。「私たちはその日に焼けた小さな老人が通り過ぎていくのを見るのだった、いつも私たちの前にまるで過去の現れが湧き出してくるように」(37)。歴史だというのは、彼が語りとしてミゲル・ベラの前に現前したからであり、歴史の根源だというのは、彼がミゲル・ベラの語りの根柢の一部を構成しているからである。マカリオの言葉は「生きられたものの香りと風味をもっていた」。「彼は村の生きた記憶だった」(41)。

だが、そもそもマカリオは何のために語るのだろうか。マカリオの言葉が伝承の問題に言及している箇所がある。歴史は、生まれ、また別の歴史へと合流し、流れ続けなければならない。歴史は断絶してはならない。つまり伝承されなければならない。「人間とは川のようなもので、生まれて別の川へと注ぎ込む。何かの役に立たなければいけない。浅瀬で途絶えてしまう川は悪い川だ」(41)。マカリオは人間であり歴史であると言える。そしてマカリオの言葉を引用し、敷衍し、複製してゆくミゲル・ベラは、事実その教えを誠実に実践していることになる。人間が死すべきものである以上、確かにマカリオ自身は「浅瀬で途絶えてしまう」かもしれないが、

彼の歴史はミゲル・ベラの記憶に「注ぎ込む」だろう。そしてミゲル・ベラの記憶とは言えば、それはそれで次の受信者（ロサ・モンソン）に受けとられることになり、さらにその歴史は次の受信者へと転送されてゆくだろう。マカリオの語りの目論見は、こうしてその教え通り、終局の見通せぬ伝達の連鎖を構成していくことになる。だがこの計画は、はたして成功していると言えるのか。答えはやや複雑だ。

まずマカリオの言葉は選択的にしか聴かれぬ。彼を真面目に取り扱わない連中、つまり歴史を蹂躪する者が存在するからだ。この点にまず歴史の断絶の危険が伏在する。ミゲル・ベラは次のように記している。「泥を投げるためではなく、彼の話や出来事を聴くために彼についてゆく者たちも、なかにはいた」(41)。つまりある者達は歴史に「泥を投げる」のだ。さらにマカリオの言葉には「生きられたものの香りと風味」があるとしても、それは「生きられたもの」を完全に言い尽くすわけではないし、ましてや「生きられたもの」自身ではありえない。彼の話は傾聴されたとしても「彼を信じない者もいた」(45) はずだし、また場合によってはミゲル・ベラ自身も「彼の言うことはよく理解できなかった」(42)。マカリオの言葉を万能視するわけにはいかない。ことによっては彼の言葉は過去の回復にはむしろ不都合だ。「私はそれを覚えているが、マカリオの話を開くと、その事件が私から離れてずっと昔にまで遡ってってしまうのだった」(47)。だが歴史の断絶の危機については、一部にはマカリオ自身にも責任がある。彼は伝言ゲームの円滑な運営を望みながら、他方、自らそれを攪乱し停滞させる。彼は自分の言葉を意図的に改竄する。たとえば、マカリオにとって彗星の事件が意味を持つとすれば、それはレブラに雇った甥との関係においてである。つまり彗星そのものは二次的な意味しか持たないということだが、それゆえ「彼はその話をするたびに少しずつ変更を加えて語るのだった。出来事をつけ加えたり、名前や日付や場所を変えたりしていた」(47)。ここに私たちの注目している斥力の徴候がある。『人間の子供』の第一章は、一方ではマカリオからミゲル・ベラへの継承線を

明らかにしつつ歴史の伝達可能性と実践を訴えるが、他方、同時に伝達経路に伏在する情報劣化の可能性を警告する。マカリオは、理論のレベルでは停滞なき伝達とその実践を説くのだが、実践のレベルでは、事実上、伝達を妨害していることになる。

じつは伝言ゲーム（歴史）はうまくいっていないのかもしれない。第一章はこの伝達行為の破産を想定しつつ、それでもなお、ゲームを続行しようとする。しかしこのような斥力の原因はマカリオばかりではない。複数の原因が重層的な合併症を起こしている。例えば第二のマカリオ、つまりミゲル・ベラは伝達行為に宿る危険を自覚していた。彼は自分の言葉の不確定性について明らかな自覚があり、自分自身の言葉がどのように伝言されていくか予測できないということを知っている。「当時私はずいぶん小さかった。私の証言は役に立つにしても中途半端なものだ」(40)。ミゲル・ベラには記憶の改竄の意識があるが「私の不確かさはあのもうろく爺さんよりもひどいものだろう、少なくとも彼は純粹ではあった」(47)。あるいはミゲル・ベラの言葉はマカリオの記憶を伝え忘れていたのかもしれない。「マカリオはそれについては何にも言っていなかった、理由は分からないが。あるいは言ったかもしれないが私が覚えていないということもある」(49)。本人の告白するようにミゲル・ベラの言表行為には懺悔の意味もあるかもしれないが、とにかくこの第二のマカリオは、マカリオ同様、伝言ゲームの参加者としては決して模範的ではない。伝言の内容は二重に信頼性を失っている。マカリオの言葉が「残響の残響」(41)だとすれば、ミゲル・ベラの言葉は「残響の残響」の残響にほかなるまい。だが伝言ゲームにはこうした不出来な参加者が予定されているのだ、というかミゲル・ベラやマカリオはもはやゲームの主体などではなく、むしろゲームの一部と言う方がふさわしい。彼らは受信した伝言を無造作に転送するための、いかにも動作の不安定な転送装置にほかならない。ある時は情報の意味を知っているが、そうでない場合もあるし、またある時は忠実に任務を遂行するが、別の場合には気まぐれに余計な上書きや削除を加えてしまう

だろう。『人間の子供』の第一章は物語全体の初期設定としてまず伝達行為に宿るこのような事情を明らかにするのだが、その波紋はテキストを貫く伝言ゲームに沿って直ちに全体に蔓延し、やがてある可能性を指し示すことになる。つまり『人間の子供』もまた「パラグアイの歴史」の伝達に失敗しているかもしれないということだ。重層的な斥力の第三の原因はここにある、つまりロア・バストスという作者の帰属する、作品の生産と消費という審級にある。作者は伝達行為における失錯可能性についてすぐれて先鋭な意識を持っているが、それを警告するためにはともかく伝達行為に訴えるしかない。つまりロア・バストスは伝達行為を前提しつつその失敗可能性を訴えていることになる。

ところで、じつは『人間の子供』において歴史の根源はマカリオだけではない。もう一人いる。ガスパール・モラをよく知る人物はその叔父マカリオだけではない。マリア・ロサがそうなのだが、しかし彼女は何も語らない(46)。あるいは語ったところでその言葉に耳を貸すものはいない。なぜか。狂っているからだ。歴史は沈黙するか、そうでなければ狂っている。マリア・ロサ(歴史)は「壊れた言葉」しか語らないのである(49)。

歴史の言葉は壊れている、したがって生は望み通りには回復されないだろう。第一章に記された一つのエピソードが、生と言葉のこのような二律背反をまさに歴史の条件として指し示している。確認しておこう。マカリオは幼年期のある事件について語ったことがある。少なくともミゲル・ベラの語りによればそのはずなのだが、今度はミゲル・ベラが、かつて聞いたはずの「マカリオによる事件の想起」を想起し、直接話法の引用で記している。その顛末はおよそ次のとおりだ。ある日の午後、マカリオは父の主人カライ・グアスが散歩に外出した留守中、金豹の置物を見つける。誘惑に逆らえずマカリオはついにそれに手を伸ばしてしまうのだが、手が触れた瞬間に火傷を負うことになる。盗難を警戒したカライ・グアス自身が火鉢にかけておいたためだ。その手に刻印された「真実の傷」(43)のために、即座に犯人は明らかになる。カライ・グアスの僕であったマカリオ

の父は最愛の息子の処罰を命じられる。以後、カライ・グアスとマカリオの父のあいだのかつての良好な主従関係は崩れ、マカリオの父は最後には裏切り者との扱いで命を落とすことになる。残されたマカリオの十二人の兄弟は離散を命じられる。

この事件の想起はいかにも一つの歴史を記している。マカリオの「真実の傷」が原因となり一家の悲劇が結果するという簡明なプロットがある。ミゲル・ベラの語りによれば、少なくともマカリオはそう考えている。だが注意すべき点はこの顛末の含意である。ミゲル・ベラの語りの根拠となる言葉であるという点で、マカリオはそれ自身歴史の起源であった。そのマカリオの起源であるはずのマカリオの父は、さらに「歴史の起源」の起源だと言ってよい。つまりここでは、上に確認しておいた『人間の子供』における歴史の継承線（ミゲル・ベラ←マカリオ）が、さらに根源に向かって追跡されていることになる。けれどマカリオの反省によれば、マカリオは父の死因となっている。「父は私の罪のために死んだのだ、彼の不幸はすべて私の盗みのための黒い傷に由来するからだ」(44)。つまり奇妙に聞こえるが、結果（マカリオ）が原因（マカリオの父）を殺害したことになる。歴史が歴史の起源を抹殺したのだ。マカリオの盗みは失敗したようにみえる。が、じつは、もう一つの盗みが行われていた。盗まれたもの、それは父の生である。盗みの報酬は前払いされた「真実の傷」。生の殺害は歴史の条件である。

第一章は、上に確認されたような物語の初期設定を通じて、いわばよりゲリラ的な戦術により、無差別にテキストの一義的確定性の芽をくじいてゆく。第一章だけではない。このテロリズムに同調するような言説はミゲル・ベラの語り以外の場所にもまた植え付けられている。ところでこの設定の意味はいかなるものか。物語世界／歴史の構想に際してロア・バストスは、歴史の客観性を保持しながら個の生を拾い上げなければならないが、しかし主観性（相対主義）に落ち込むわけにはいかなかった。独我論にはコミュニケーションの喪失（他者の喪失）の危険が宿っており、そうなる

と歴史の客観化可能性そのものが失われることになるからだ。ところが第一章に集約的に確認されたように『人間の子供』は、伝言ゲームに伏在する参加者の失錯可能性を指摘する。歴史が伝達行為に根拠をもつ以上、歴史にはこのような可能性が織り込まれている。だとすれば『人間の子供』は超越論的言語ゲームの可能性、つまり歴史の客観化可能性を確保した上で、同時に世界／歴史の単数性を内破していると言える。つまり『人間の子供』はテキストの様相性の点から世界／歴史を複数化しているということだ。

伝達経路上のエラーの可能性を考慮に入れると、すべての情報はそれが誤情報であるかもしれないという可能性を抱え込むことになる。すると、たとえば『人間の子供』に含まれる動詞の直説法の意味は、直説法でありながら条件法的な含意に変質してしまうだろう。確度の点で目減りすると言ってもよい。世界／歴史は確定性を失い、そのかわりに反事実的条件文の掃結節の数ほど分岐をもつ可能世界の集合になる<sup>27)</sup>。つまり歴史の全体像を想定することが不可能になる、あるいは歴史の全体は無数の可能性に分割され、その可能性をどれほど積算しても決して全体には届かない。まさにこの意味で『人間の子供』の歴史は開放性を保持できる。その最終的な述語は「パラグアイの歴史である」ではなく「パラグアイの歴史であったかもしれない」になるだろう。

## V 結論

最後に、さらにいくつかの論点を確認しながら問題を提出し、ひとまず本論を終えなければならない。次の点について確認しておこう。(1) ロア・バストスの世界／歴史の構想の意味と、(2) 歴史の文学性という点である。

### (1) ロア・バストスの世界／歴史の構想の意味について

デカルトは「世界という大きな書物」<sup>28)</sup>を読む。それは明晰な言葉で書

かれているが、そこには書かれていないものが一つある。それは形而上学的主体としてのデカルト自身にほかならない。形而上学的な世界の構想においては、世界のなかに〈私〉が現れてこない。一方、ハイデガーの読む世界にはハイデガー自身が書かれている。それは〈私〉を作中人物とし〈私〉によって書かれた世界である。ロア・バストスもまた世界という書物を読む。が、その書物を記す文字の刻印は多重にブレている。『人間の子供』は、まず物語の枠構造として形而上学的世界の体制（三人称の語り）とハイデガー的・現存在的世界の体制（一人称の語り）を導入し、その対立関係を構造化する。だがこれだけでは十分ではない。というのは、このような演出はプラトン・ヘーゲル的な意味での目的論的弁証法の圏内にあるのであり、それがいかに巧妙であろうとも、最終的にはおのれの演出意図にかなう自作自演の対話として作者の内面的なモノローグの中に回収されてしまうことになるからだ。つまり『人間の子供』は独我論的（形而上学的）に自閉せざるをえない。だが、さらに歴史の伝達経路上の失錯可能性が考慮されると、そこに可能世界（条件法で書かれた世界）の存在が世界の成分として加算されることになる。こうして世界／歴史は上書きに上書きを重ねることになる。だがそうすると、ロア・バストスによって構想される世界／歴史は、もはや所有者のない影、あるいは「声に先行する残響」<sup>29)</sup>のようなものになってくる。

このような世界は世界と呼べるものだろうか。既成の歴史への不信が歴史批判の動機となっていたとすれば、ロア・バストスにとって歴史とは、確かに、そもそも信じるというよりはむしろ懐疑する対象であったはずだし、そうすると不確定な可能性の束として歴史を骨抜きにするという成りゆきは、理解できないものではない。歴史（言葉）と生とのあいだの決定的な背反については明確な意識があるため、ロア・バストスは言葉に訴える以上、理想的な歴史の実現という理想をあらかじめ断念してかからなければならないし、実際その覚悟を確認することはできる。ならば、そのかわりせめて歴史の閉鎖性に打撃を与えること、これをロア・バストスの妥

協点と考えることもできる。

だがその副作用はいかほどのものであったか。パラグアイの現実、自己同一性、あるいは客観的歴史や「公認の歴史」に黙殺されてしまう個人的な生などといった歴史的イメージ一般は、もはや歴史（言語）の閉鎖性もろとも骨抜きにされ、歴史に記載されるとしても、いかにも不安定な可能性の束としてしか存在できない。せめてもの救いは不在未満の非存在という身分から、たとえ可能的な「影の影」にすぎなくても、存在領域（関心の圏内）へと格上げされたことである。後に残るのは歴史の可能態についての際限ない反省なのであって、事実上、真の歴史を突き止めることではない。この意味で『人間の子供』は、真の歴史のアリバイ（現場不在証明）工作だと言うことができる。真の歴史はいつも別の場所に存在する。正確に言えば、真の歴史はいつも別の場所に存在するのかもしれない。『人間の子供』はこのことを告げている（のかもしれない）。歴史は私たちを、いつももう一つの歴史へと送り返す。こうして『人間の子供』は既成の歴史の絶対性を骨抜きにする一方で、ふたたび歴史を絶対化することになる。歴史は語り得ぬものとして神秘化されることになるだろう。

## （2）歴史の文学性について

ふたたび小林秀雄のテキストに立ち戻ってみる。本論のはじめのところで参照された「歴史と文学」において小林は、必然性の歴史形而上学に抵抗するための処方箋を記している。彼はそこで、歴史と文学との本来的な親近性について言及する。小林は「古典的史書が歴史か文学かどつち付かずの形をしてゐる」<sup>30)</sup>ことを指摘し、その理由として「文学風」な言葉のもつ表現能力を考えている。つまり「自ら背負ひ、身体にのしか、つて来る目方のしかと感じられる歴史の重み」を、その感覚、感情のそっくりそのままの表現をすると、それは文学風の言葉になるというわけだ<sup>31)</sup>。「歴史から文学を無理に挽ぎ取つた事により、現代の歴史家が紛失して了つたもの」とはおそらく、小林の言う歴史の意味とか「歴史の実景」というこ

とだ。とすれば「歴史の地図」に文学性を投与すれば、小林の望み通り歴史の本来性が回復されることになりそうだ。

だが伝承経路上のエラー可能性まで含めて歴史が疑われるとなると、情緒的価値の伝達もまた同じ視界で扱われることになるし、またかりに歴史が何らかの感覚や感情を惹起し得たとしても、それは制御不能なものになるだろう。小林の直観を額面通りに信じるわけにはいかないし、またそれはロア・バストスの問題にとっては特効薬ともなりえまい。とはいえ小林とは別の意味でだが、『人間の子供』を通じてなされたことには歴史の文学化という含意があると言える。どうやら小林にとっての望ましい歴史とは、何らかの意味で小林の気に入るような物語であればよさそうなのだが、その条件の主要なものが、実証主義的な無味乾燥さを免れているということである。問題なのは歴史の迫力とかりアルさとか納得性とかであり、小林の場合、そうしたものは物語の感情的な効果に基づいたもので、それこそ実証的な無味乾燥さを克服してくれるものなのだ。ロア・バストスは言語の限界を知りながら、それでもまずは既成の歴史への抵抗から出発する。つまりそれ以上に真なる歴史が求められる。真の歴史が突き止められることは決してないが、その存在は要請されている。「公認」という権威が生む抑圧を繰り返さないこと、つまりいつも未公認の歴史であり続けること、歴史の文学化はそのお膳立てに一役買うだろう。歴史批判を考えたときいかなる選択肢が可能であったらうか。ともかく、ロア・バストスは小説に訴えないこともできたはずだ。だが実際は小説を書いた。ロア・バストスは小説というエンターテイメントの圏域に立つことで、学的な真実の伝達ともなう責任や権威の圏外に立つことができるし、『人間の子供』を未公認の歴史として確保することもできる。またそうなるとテキストの上書きや削除も気軽なものになる。事実、ロア・バストスはテキストの翻案の存在について肯定的な見解を示し、書き直しを正当化する。「書き直しの詩学は〈決定済みのテキスト〉を転倒し活性化するのだ」<sup>32)</sup>。

理性に先行する意志や生が、歴史によって抑圧を受けるという事態に、

ニーチェは敏感な反応を示した。彼には理性よりもまず生が一次的なものであるため、生の役に立たないような歴史は、無用なばかりか端的に害悪でさえある。「歴史が生に奉仕する限りにおいてのみ、私たちは歴史に奉仕しよう」<sup>33)</sup>。おそらくロア・バストスの基本的な態度もこれと異なるものではなさそうだ。ロア・バストスにとっての問題の一つは、一見必然的に見える歴史を前にしたときの、人間に許された自由の問題だと言えるかもしれない。だがロア・バストスの歴史はいかにして生に奉仕できるのだろうか。その開放性は過剰で、ただ悪戯に懐疑の対象を増殖するだけではないのか。ニーチェはこうも言っている。虚構を承認することなしには、世界を絶えず偽造することなしには、生きることはできない。「非真理を生々の条件として容認すること」<sup>34)</sup>。

#### 注

- 1) Augusto Roa Bastos, *Hijo de hombre* (Madrid: Espasa Calpe, 1993).
- 2) Clara Passafari de Gutiérrez, “La condición humana en la obra narrativa de Roa Bastos,” in Helmy F. Giacomani (ed.), *Homenaje a Roa Bastos: Variaciones interpretativas en torno a su obra* (Madrid: Anaya, 1973), p.28.
- 3) *Ibid.*, p.28.
- 4) *Ibid.*, p.28.
- 5) Mario Benedetti, “Roa Bastos entre el realismo y la alucinación,” in Giacomani (ed.), *op. cit.*, pp.19–24. 物語の最後に位置するこの一節は私たちの参照する版のテキストからは削除され、より簡素な表現に書き換えられている。
- 6) *Ibid.*, p.23.
- 7) Augusto Roa Bastos, “Nota del autor,” in Augusto Roa Bastos, *Hijo de hombre* (1993), p.31.
- 8) 小林秀雄「歴史と文学」『小林秀雄全集』第七巻, 新潮社, 1968年, 200–223ページ。
- 9) 同上書, 205ページ。
- 10) 同上書, 206–207ページ。
- 11) マルティン・ハイデガー『存在と時間』上・中・下巻, 桑木努訳, 岩波文庫, 1960年。
- 12) 小林前掲書, 208ページ。

- 13) G. W. F. Hegel, "Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte," *Werke 12* (Frankfurt am Main : Suhrkamp, 1970), p.20. 邦訳『歴史哲学』(上) 武市健人訳, 岩波書店, 1954年, 31-32ページ。
- 14) このような度外れの理性偏重ないしは生に対する理性の暴力への抵抗感, 無論, 小林に固有のものというわけではない。例えば西欧実証主義に対する反動的な一連の批判や, ニーチェ, デルタイ, ハイデガーらの「生の哲学」と呼びうるような一連のアイディアを参照。
- 15) Adriana J. Bergeo, "Prólogo," in Augusto Roa Bastos, *Hijo de hombre* (1993), p.22.
- 16) Roa Bastos, op. cit., p.330.
- 17) Michał Głowiński, «Sur le roman à la première personne.» in Gérard Genette (ed.), *Esthétique et Poétique* (Paris : Seuil, 1992), p.232.
- 18) Ibid., pp.230-231.
- 19) この二組の対概念は厳密に重なり合うというわけにはいかない。たとえば極度に主観的な生が言語として析出することによりある種の客観性を帯び, その結果, 公認の歴史という資格を与えられる可能性は想定される(アウグスティヌスの『告白』の一人称など)。反対に三人称におかれた客観的な歴史が公認されない場合も考えられる。『人間の子供』の三人称が焦点化しているのは, むしろこの後者のような非公認の客観的な歴史だと言える。歴史一般に関わる厳密な分析概念としての客観性や主観性ということについては, 本論の枠組みを大きく超出することになるのでここでは立ち入らない。ただし客観性が公認ということの必要条件だということはできる。さらに主観的, 客観的の区別は主題の選択の問題ではない。いずれも一個人の人生を主題化することができるし, 同様に共同体規模の歴史を主題化することもできる。『人間の子供』の三人称は複数の個人の生(の断片)を扱っていると言うことができる。
- 20) Émile Benveniste, «La nature des pronoms,» *Problèmes de linguistique générale, 1* (Paris : Gallimard, 1966), p.252.
- 21) Andris Kleinbergs, "Estudio estructural de *Hijo de hombre* de Roa Bastos," in Giacoman (ed.), op. cit., pp.187-201. 参照されているテキストは作者により修正が加えられる前の版で, 九章からなっている。
- 22) David William Foster, "Nota sobre el punto de vista narrativo en *Hijo de hombre* de Roa Bastos," in Giacoman (ed.), op. cit., p.158.
- 23) Hegel, op. cit., p.86. 邦訳前掲書, 102ページ。
- 24) Adriana Valdés Ignacio Rodríguez, "*Hijo de hombre* : El mito como fuerza social," in Giacoman (ed.), op. cit., p.99.

- 25) Roa Bastos, op. cit. 括弧内は同書のページ数を示す。以下同様。
- 26) Friedrich Nietzsche, “Unzeitgemäße Betrachtungen II: Vom Nutzen und Nachteil der Historie für das Leben,” *Sämtliche Werke I* (München: dtv/de Gruyter, 1988), pp.248–249. 邦訳「反時代的考察」『ニーチェ全集』第二巻, 大河内了義訳, 白水社, 1980年, 118ページ。
- 27) 様相論理学が問題にする可能世界意味論を参照。クリプキはこの用語の使用について慎重な警戒を示している。というのは、この用語はことによると「遠くの惑星のようなもの」「異次元に存在しているもの」あるいは「おとぎの国か何かに存在して」いるようなものといった含意を持ってしまいがちだからである。クリプキはそのかわりに「世界の可能的状態（または歴史）」あるいは「反事実的状况」という用語を提案している。「可能世界」とは「『世界がありえたかもしれないあり方』の全体、あるいは世界全体の諸状態ないしは諸歴史のことである」(p.18.邦訳20ページ)。例えば二つのありふれたサイコロを振った場合、出る目以外の状態をすべて無視すれば可能な状態は三十六通りであり、その内のただ一つだけが現実の状態に対応する。この三十六通りの可能性がほぼ正確に三十六の「可能世界」だと言える。実際に問題になる「可能世界」はこの確率の問題と原理的にはまったく等しい。ただしこの実験では対象(サイコロ)と性質(出た目の数)について完全に制御されている。だが世界全体あるいは歴史全体についての「可能世界」を想定するには「はるかに大きな理想化と人をたじろがせるような問題とを含んでいる」。クリプキについては次を参照。Saul A. Kripke, *Naming and Necessity* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1980), pp.15–20. 邦訳『名指しと必然性』八木沢敬・野谷啓一訳, 産業図書, 1994年, 17–22ページ。
- 28) René Descartes, “Discours de la méthode,” *OEuvres et lettres* (Paris: Gallimard, 1953), p.131. 邦訳『方法序説』落合太郎訳, 岩波文庫, 1988年, 20ページ。《le grand livre du monde》は、参照された邦訳版では「世間という大きな書物」と訳されている。
- 29) Severo Sarduy, *Barroco* (Paris: Seuil, 1975), p.11.
- 30) 小林前掲書, 210ページ。
- 31) 同上書, 210ページ。
- 32) Augusto Roa Bastos, “Nota del autor,” in Augusto Roa Bastos, *Hijo de hombre* (1993), p.33.
- 33) Nietzsche, op. cit., p. 245. 邦訳前掲書, 115ページ。
- 34) Friedrich Nietzsche, “Jenseits von Gut und Böse,” *Sämtliche Werke V* (München: dtv/de Gruyter, 1988), p.18. 邦訳「善悪の彼岸」『ニーチェ全集』第二巻, 吉村博次訳, 白水社, 1983年, 21ページ。